



山椿

Yamatsubaki 97

Fujita Mitsuhiro
ダニエル(藤田 充宏) (53期)

今年、2025年は、コンクラーベ（教皇選挙）が実施された年でした。ローマ教皇フランシスコが4月21日に天に召されたため、バチカンのシティーナ礼拝堂において、次のローマ教皇を選出する選挙が実施されました。それがコンクラーベと呼ばれる特別な手続です。前回コンクラーベが実施されたのは、ローマ教皇ベネディクト16世が退位された2013年ですので、実に12年ぶりということになります。

ローマ教皇とは、ご存じのとおり、バチカン市国の国家元首であるとともに、全世界に約14億人の信者がいるローマ・カトリック教会の最高位の聖職者です。同じキリスト教徒でもプロテstantの方々にとっては、その人自身に直接の関係はないかも知れません（かくいう僕自身もプロテstantのキリスト教徒です）。とは言え、ローマ・カトリックであれプロテstantであれ、いずれも三位一体なる神を信じるキリスト教徒ですので、彼らは、主にある兄弟姉妹であることには変わりありません。その意味では、ローマ教皇に誰が選ばれるか、ということは、ローマ・カトリックの信者に限らず、全世界約24億人のキリスト教徒全体にとっての大きな関

心事であると言えると思います。

他方、我が国に目を向けますと、日本には、キリスト教徒は約100万人しかいません。人口比にしてわずか1%にも満たない超少數派です。その日本においても、今年のコンクラーベは大きなニュースとして取り上げられました。日本で大きな話題となった理由の一つには、奇しくも2025年という年が、「教皇選挙（原題は「CON CLAVE」）」という映画が日本で劇場公開された年であったことが挙げられます。しかし、キリスト教徒が極めて少ない我が国においてコンクラーベが大きなニュースになった理由は、それだけではないと思います。それは、宗教に対する日本人特有の無邪気さ、無頓着さ、というか、良い言い方をするならば、豊かな寛容性によるものではないでしょうか。

よく言われることですが、キリスト教国ではない日本において、毎年のクリスマスがこれほどまでに盛り上るのは奇異なことです。もちろん、商業主義によってクリスマスが利用されている面が多分にあることは否定しませんが、そうはいっても、クリスマスという

正真正銘の宗教行事がこれほどまでに日本で盛り上るのは大変興味深いことだと思います。

今年も、年末が近づくにつれて、クリスマスにまつわるものが徐々に登場し始め、ついには、町中にあふれるくらいになることでしょう。そのときに、1人でも多くの日本人が、クリスマスとは本来は主イエス・キリストの誕生を祝うお祭りであることに思いをはせていただきたいと切に願うところです。最初は、本来の意味を考えないまま「クリスマスを祝う」という表面的なところから始まるのでも構わないと思います。それが、徐々に文化として日本社会にも根付いていき、そのうちに、いつしか、クリスマスの本来の意味を考えようになっていってくれれば、それはそれで悪いことではないと思います。文化が変わる過程として、ある程度の遠回りは必要なのかなという気もしています。 N_F



東京女子大学のクリスマスイルミネーション